

お茶を飲み干して、それからお風呂を洗ってお湯をためている間に、流しに溜まっている洗い物を片端から片づける。

メリーがあきれるように言った。

「こういうときばかり、蓮子は働きものよねえ」

「そんなこと無いわよ。まあ、楽しみが先にあると手が独りでに動くのは確かだけど」
きゅつと流しの水を止めた。

「ほら、先に行つてきて。わたしはあなたが乾かしてる間に入るわ」

「うん。ありがとう」

メリーは恥じらうように少しだけでもじして、それから風呂場へ向かった。

「メリー。椅子に座つて」

「う、うん」

言われるがままのメリーの身体からは石けんの良いにおいがする。それが部屋全体に広がっていき、くよくよと心地よい。わたしは向かい合わせになって、床に座る。風呂上がりのほかほかとしたメリーの右足をそつと手にとつて、フットバス代わりに湯をはった洗面器にゆつくりと沈める。ラベンダーのアロマオイルでもあればもつと良かったのだけれど、残念ながらそこまで用意していない。もう片方の足をうやうやしく取り、自分の膝の上にのせる。そして、手のひらで暖めたマッサ―

ジョイル代わりのベビーオイルをなじませていく。指の間から丁寧にもみほぐし、こりこりとした疲労物質が体幹の流れに戻っていくように末端から押し出していく。足先から足の裏、かかと、ふくらはぎまで丁寧にマッサージしてやる。

「あつ、」

「大丈夫？ 痛くない？」

「ん……きもちいいわ」

今にも眠りそうなほどとろけたメリーの声に、わたしは嬉しくなる。ころんと丸っこい足の爪が愛らしい。ざっと手をぬぐってから、丁寧にやすりで形を整えてやる。それから、そっとフットバースに戻す。

「お湯、ぬるくない？」

「だいたいぶよ、ありがとう」

右足のしっとりとした肌に触れる。メリーの足はかかところが細くて、全体的にもほっそりとしているから、本当にお姫様の足、という感じがして綺麗だと思う。角質もほとんどなくて、丁寧に手入れされている感じがした。

「メリーの足は、ガラスの靴がはける足よね」

「どういうこと？」

「だって、考えてもごらんさない。ガラスで出来ているということは透明で、全部中身が見えてし

まうのよ。本当にびったりで綺麗な足じゃないと、足がひんまがつたり、ぎゅうぎゅうに押し込められて、しわくちやになつてるのが丸見えになつちやう」

「なるほど。でも履き心地は悪そうね」

「ガラスだものね。それにきつとハイヒールでしょうから、歩きにくいだろうとは思うわ。走ると脱げてしまいうぐらいだもの」

「逃がさないようにするための道具だったのかしら。中国の纏足てんそくみたいに」

「まあ、シンデレラは靴なんかに惑わされずに逃げたけれどね」

「とにかく自由意志が大事ってことなのね」

「……そういう話だったかしら」

ちよつとイメージと違うような。まあいいか。マッサージを終えて、お湯につけておいた足を丁寧ていねいにタオルでぬぐう。クリッパで甘皮を手入れしてやる。

「ずいぶん、準備がいのね」

「メリーだからよ。自分だったらこんなに丁寧に丁寧にはしないわ」

足の間に脱脂綿を挟んで、それからベースコートを丁寧にのせていく。つんと有機溶媒の匂い。

「ああ、窓開けなくちや」

からからと音を立てて、ペランダの窓を開ける。外には月と星。午前三時五七分。ここは太陽系第三惑星、地球、日本、京都、メリーのそば。

すぐに目をそらす。わたしは、自分の見たいものだけを見たい。

「どうしたの？」

「うん。何でもないわ。ただ、月がきれいだなって」

そう言うてから、それが古式ゆかしい愛の告白だったことを思い出す。けれど、いまさらそれに頓着はしない。深い意味などない。

「そうね、きれいね」

メリーはそれに気づいたのか、気づかなかったのか、ただ静かにうなずき返すだけだった。

海の色をした、とろりとした液体を一刷毛はけずつのせていく。時々、夜風がからからとブラインドを鳴らすのが、どこか風鈴を思わせた。

ゆっくりと冷めていく身体の熱。蒸散していく溶媒。固化する塗膜はかたくなで、ひび割れることのないように身じろぎもしない。息を詰めて、わたしはメリーの足の先を見つめる。一点を見つめて震えないようにすっ、すっ、と手先を動かしていく。ひざまずき、お姫様に奉仕する従者のように、彼女に触れている。

保護するための透明なトップコートまできちんと塗り終わって、わたしは一息ついた。

「さ、おしまい。ちゃんと乾くまで触らないでね」

「うん。ありがとう。蓮子のおかげで、綺麗にしてもらっちゃった」

はにかむように笑った。